様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１４５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００５５７

研究課題名（和文）ヨーロッパ言語と日本語・中国語比較による主題構造のカートグラフィー研究

研究課題名（英文）A Comparative Cartographic analysis of Topic Structure Among Japanese, Chinese, and European languages

研究代表者
中村　浩一郎（Nakamura, Koichiro）

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：５０２７９０６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：[1] イタリア語、ドイツ語などに関して論じられている主題要素の生起順が厳密に決まっていることを日本語、中国語のデータと比較対象した結果、日本語には当てはまらない一方で中国語には当てはまることが実証できた。
[2] グン語で言われる焦点を示す要素が日本語では強勢を受ける格助詞「が」あるいは副助詞「は」であることが判明した。また、この事実が中国語の語気助詞にも適用できるのでは、という見通しがたった。
[3] 分担者が、本務校である名桜大学の中国語学習者のデータを収集したことにより、日本語と中国語の文構造比較によるより効果的な中国語教育への提言ができる一歩手前まで辿り着けている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
[1] 学術的意義：ヨーロッパ言語で言われ、一般化されていることが、日本語には当てはまらないことを示せたことは、比較統語論に対する大きな貢献である。統一的な言語理論構築に対する前進である。
[2] 社会的意義：日本語を母語とする大学生に対する中国語教育と中国語を母語とする大学生に対する日本語教育を行う際、母語の知識に基づいて、母語との比較を念頭に置いた教育の有効性を検証した。その理論的裏付けとして、日本語と中国語の主題・焦点構造をカートグラフィーと呼ばれる統語構造分析に基づいて比較し、その共通点と相違点を明示することができた。目標言語を学習する際に、母語の知識を使うことの有効性を実証した。

研究成果の概要（英文）：[1] We investigated the validity of the rigid word order of topic elements depicted in European languages such as Italian and German. At the same time, we tried to apply these to Japanese and Chinese. It has turned out that Chinese behaves similarly to European languages, while for Japanese it is not the case.
[2] It is well known that langaues such as Gunghe have a specified focus marker. We scrutinized the possibility of applying this fact to Japanese and Chinese data, and we have begun to make a unified theory of focus marker across languages.
[2] Based on the data collected from Japanese university students who learn Chinese, we have taken a valid step toward proposing a more effective way to learn Chinese. Also, we are getting closer to make a comparison betweenJapanese education to Chinese university students and Chinese education to Japanese university students.

研究分野：理論言語学

キーワード：主題　焦点　統語構造　カートグラフィー　母語の統語構造理解　中国語教育　日本語教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

É.Kiss(1995)、Rizzi(1997)以来進展してきたカートグラフィー研究は、主題、焦点などの談話的要素(discourse-oriented material)が CP 左端部にある Topic Phrase (TopP)、Focus Phrase (FocP)の指定部へ移動、あるいは基底生成された結果、発話される位置に現れることを明らかにしてきた。英語との比較を基に、イタリア語、ハンガリー語の分析から始まったこの研究は、次第にスペイン語、フランス語、ドイツ語などの他のヨーロッパ言語へとその対象が広がり、近年では、日本語、中国語などのアジア言語のみならず、グンベ語などのアフリカ言語にも広がりを見せている。これらの諸言語の分析を通して、カートグラフィー研究の有効性・妥当性が確立されてきた。しかし、日本語、中国語分析はまだ進展途上にあり、新たな理論は構築されていなかった。

２．研究の目的

Rizzi(1997)の出版から 2019 年までで、イタリア語、ハンガリー語、スペイン語などヨーロッパ言語を中心に研究されてきた成果を踏まえた本研究の目的は、以下の２点である。

(1) ヨーロッパ言語と日本語と中国語との比較対照研究から、CP 左端部の主題構造が持つ談話的・意味的・統語的特性とその普遍的特性を明らかにする。

(2) その普遍的特性には収まらない個別言語の特徴を調査することによって、言語間における主題構造の変異（相違点）を明らかにする。

É.Kiss(1995), Rizzi(1997)以来の研究成果から、以上 2 点を研究当初の目的とした。

３．研究の方法

(1) 研究方法

これまでのカートグラフィー研究から、ヨーロッパ言語の CP 左端部の構造が解明されてきた。マクロ的視点からは、その普遍性が捉えられる一方で、ミクロ的には言語間による差異も認識されてきた。他方、日本語、中国語の CP 左端部の研究はまだ進んでいない。本研究では、カートグラフィー研究に基づいてヨーロッパ言語と日本語、中国語の CP 左端部の比較対照研究を進めることによって、CP 左端部が持つ普遍性や個別性を明らかにする。更に、理論的分析を中国語教育に応用する方法を探求する。その目的を達成するため、研究方法を以下の 4 つに分類する。

(i)先行研究の検討とインタビュー調査を中心とする言語データ収集

(ii) データ分析のための検討会開催

(iii)国内外の学会参加と研究成果発表と論文執筆

(iv) 学術雑誌への投稿と学会でのワークショップ開催とホームページ上での研究成果公表

(2) 研究体制

研究を効果的に進め、研究体制を明確にするため、ヨーロッパ言語、日本語のカートグラフィー研究、データ分析を代表者（中村）が担当し、中国語のカートグラフィー研究、データ分析を主に分担者（山城）が担当する。

(3) 年度ごとの実施状況　以下、上記 (1)研究方法における(i)-(iv)の分類ごとに記述する。

2019 年度

(i) 購入した文献などを通して、中国語、イタリア語などの理論的研究で扱われているデータは収集できた。ただ、分担者が中心となって 2020 年 3 月に予定していた中国南開大学における中国人の日本語学習者に対するインタビュー調査は、新型コロナウイルスにより行うことができなかった。一方、分担者の日本人中国語学習者のデータ収集(国内)は、予定通り行われている。主題構造の比較を中心とした教授法によって、学習者の中国語の理解度に関するデータを収集している。

(ii) データ分析検討会は、日本人中国語学習者のデータに関して一度行った。

(iii)代表者はパリ開催の国際学会において日本語の助詞「わ」と「が」が主要部位置を占める経験的根拠を示した。また、北京開催の国際学会において関西弁の「やん」をカートグラフィー分析し、evaluative modal の主要部に位置するという趣旨の研究発表を行った。更に、日中主題構造を比較した"Types and functions of wa-marked DPs and their structural distribution in a Japanese sentence"と題する論文が John Benjamins 社から出版された) Information- Structural Perspectives on Discourse Particles.に掲載された。 分担者は 2020 年 3 月に学会・シンポジウムへの参加を予定していたが、いずれも新型コロナウイルス感染拡大予防のため中止となった(東京外国語大学、上智大学、一橋大学)。

2020 年度

(i) 日本語、中国語、イタリア語、スペイン語、 英語などの比較対照研究を通して、普遍的な主題構造を提案することに一層近づいた。

(ii)Familiar topic, frame-setter, contrastive topic と呼ばれる主題句の生起順がドイツ語、イタリア語では決まっているというという分析がなされており、これが中国語にも当てはまると言う趣旨の分析がなされ始めている。これに対する、日本語から提示する分析を通しての反論としての論文を、2020 年 9 月に実施される 50th Poznan Linguistic Meeting におけるワークショップ Word Order Matters で発表する予定であったが、新型コロナウィルス感染症拡大のため 2021 年に延期となった。

(iii)分担者が中心となって行う中国天津市南開大学における日本語学習者に対するインタビュー調査は、年度中に予定していたものの、新型コロナウイルス感染症拡大により渡航が不可能となり、行うことができなかった。代表者の"Another argument for the differences among wa-marked phrases"は John Benjamins から 2021 年 9 月発行予定の Fuzhen Si and Luigi Rizzi. eds., Current Issues in Syntactic Cartography: A Cross-linguistic Perspective に掲載される。

2021 年度

(i), (iii), (iv)代表者は国際学会発表を 2 回、図書 1 冊を出版した。1 件目は 2021 年 9 月 16 日開催 50th PLM Workshop “Word Order Matters” における“Arguments against the rigid word order and occurrence restrictions among topic elements: evidence from Japanese”である。主題要素の生起順がイタリア語、ドイツ語、さらには中国語で制限されている事実に対し、日本語から反論を提示した。2 件目は 2021 年 10 月 30 日に開催された 4th IWSC における“Focus Constructions in Japanese and Chinese-From Semantic-pragmatic perspective to Cartography Investigation”である。ここでも、日本語と中国語の焦点・主題構造をイタリア語などのヨーロッパ言語と比較した。更に、2021 年 11 月開拓社刊行の『統語論と言語学諸分野とのインターフェイス』を編集し、第 5 章「カートグラフィーと情報構造とのインターフェイス」を執筆した。この章では、日本語・中国語とイタリア語、

ハンガリー語を研究対象に、カートグラフィー研究と情報構造研究の 歴史から発展の経緯を分析し、最新の研究成果を紹介した。また、前年度執筆の“Another argument for the differences among wa-marked phrases"は 2021 年 9 月発行の Fuzhen, Si and Luigi Rizzi. eds., *Current Issues in Syntactic Cartography: A Cross-linguistic Perspective* に掲載された。
(ii)分担者が計画している中国南開大学でのデータ収集、インタビュー調査はコロナ禍により実行できなかった。

2022 年度
(ii)分担者は自身が担当する中国語クラス(中国語 I、中国語 II、外国語特別講義)において、文法理解に関するスライド資料を新たに作成し、昨年度までと比較した。初学者と学習歴 1 年以上の学生のデータを収集し、受講者が持つ文法のイメージを分析した。特に、「完了・変化の了」、「是—的構文」、「形容詞述語文」に関する項目で顕著な違いが出た。
(iii), (iv)代表者は日本英文学会九州支部第 75 回大会シンポジウムにおける研究発表「主題要素の種類とその語順を巡って-カートグラフィーと情報構造のインターフェイス-」を行い、その概要が Proceedings に掲載された。主題要素の生起順がイタリア語、ドイツ語、中国語で規程されているとの主張に対し、日本語, 英語の例から反論を提示した。また、Witkoś, J. and Tajsner, P. (eds.) *Word Order Matters: Current Issues in Syntax and Morpho-Syntax* (Peter Lang) に Poznan Linguistic Meeting Workshop Word Order Matters での口頭発表内容を修正した"Arguments against the rigid word order and occurrence restrictions among topic elements: Evidence from Japanese, Hungarian, and English."が掲載された。また、『ブックレット統語論・文法論概説』では情報構造が関わる統語現象について記述した。また、人文学会論叢第 41 巻"A Cross- linguistic Perspective of Topic and focus Markers"では諸言語の主題・焦点表示の統語構造について分析した。

2023 年度
(ii) 分担者は中国南開大学韓立紅氏と共同で 2023 年 7 月に南開大学学生と名桜大学学生と共に日本語教育ワークショップを行なった。
(iii)代表者は 2023 年 9 月にギリシャアテネで開催された Societas Linguistica Eupopaea におけるワークショップ The Concept of Manner and Its Linguistic Realizations において「Structural Positions and Focal Stress Dictate Functions and Interpretations of Japanese Manner Adverbs」と言う演題で研究発表を行った。日本語における程度副詞の意味解釈が統語構造位置と副助詞「は」との関連で決定するとの趣旨である。この論文を大幅に改訂した論文は、同ワークショップの Proceedings に掲載されるため審査中である。更に、2023 年 10 月に中国北京で開催された 5th International Workshop on Syntactic cartography において「A Cartographic Investigation of Clitic Left Dislocation in Japanese」と言う演題で研究発表を行った。日本語における左方転移構文をイタリア語などのヨーロッパ言語との比較において分析するものである。更に、代表者・分担者の共同発表「分裂文の日中英比較対照分析」と題する研究発表を 2023 年 6 月に沖縄県名桜大学において開催された第 38 回沖縄外国文学会で行った。また、代表者は 2023 年 4 月に開拓社から『ブックレット統語論・文法論概説』を発行した。これは、日本語との比較を念頭に置いて、英語の文法構造を概説したものである。

４．研究成果

代表者は 5 年間にわたって日本語・中国語とヨーロッパ言語の主題・焦点構造をカートグラフィーの枠組み分析した結果、以下のことを研究成果としてあげることができる。

[1] イタリア語、ドイツ語などで示されている主題要素の厳密な生起順は日本語には当てはまらない。一方、この生起順は中国語に関しては当てはまる。この日本語と中国語の差異が明確となった。

[2] 焦点要素を示すマーカーがグン語などにあることは知られているが、そのマーカーを日本語と比較することにより、強勢を受ける格助詞「が」あるいは副助詞「は」が主要部要素であることが明らかになってきた。ただ、この点はまだ作業仮説であり、その精査は今後の課題である。更にこの分析を中国語の語気助詞にも適用する可能性を検証しすることも今後も課題である。

[3] 以上のような理論言語学的視点からの研究成果を中国での日本語教育と日本での中国語教育に応用することも本研究の大きな目的であった。コロナ禍により、中国天津南開大学でのデータ収集と日本語学習者へのインタビューは実現できなかった。とは言え、分担者が本務校である名桜大学の中国語学習者のデータを収集したことにより、日本語と中国語の文構造比較によるより効果的な中国語教育への提言ができる一歩手前まで辿り着けている。理論言語学の研究成果を日本語教育、中国語教育へ応用する準備ができているといえる。これも本研究の大きな成果である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Koichiro Nakamura	４．巻 75
２．論文標題 Issues of the Rigid Word Order Restrictions among Topic Elements　Interface between Cartography and Information Structure	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本英文学会九州支部第75回大会Proceedings	６．最初と最後の頁 19 20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Koichiro Nakamura	４．巻 第41巻
２．論文標題 A Cross- linguistic Perspective of Topic and focus Markers	５．発行年 2023年
３．雑誌名 人文学会論叢－言語・文化・文学－（人文学会）	６．最初と最後の頁 1 18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　1件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 Koichiro Nakamura
２．発表標題 Structural Positions and Focal Stress Dictate Functions and Interpretations of Japanese Manner Adverbs
３．学会等名 Societas Linguistica Europe 2023 Workshop 17 The Concept of Manner and Its Linguistic Realizations（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Koichiro Nakamura
２．発表標題 A Cartographic Investigation of Clitic Left Dislocation in Japanese
３．学会等名 International Workshop on Syntactic Cartography 2023（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 中村浩一郎・山城智史
２．発表標題 分裂文の日中英比較対照分析
３．学会等名 沖縄外国文学会第38回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 中村浩一郎
２．発表標題 主題要素の種類とその語順を巡って-カートグラフィーと情報構造のインターフェイス-
３．学会等名 日本英文学会九州支部第75回大会シンポジウム『統語論と言語学関連分野とのインターフェイス』（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Koichiro Nakamura
２．発表標題 Arguments against the rigid word order and occurrence restrictions among topic elements: evidence from Japanese
３．学会等名 Workshop “Word Order Matters” at 50th Poznan Linguistic Meeting（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Koichiro Nakamura
２．発表標題 Focus Constructions in Japanese and Chinese-From Semantic-pragmatic perspective to Cartographic Investigation
３．学会等名 4th International Workshop on Syntactic Cartography（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Koichiro Nakamura
２．発表標題 The Japanese particles ga and wa should be in Focus and Topic head positions
３．学会等名 32nd Paris Meeting in East Asian LInguistics（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Koichiro Nakamura
２．発表標題 A Cartographic Analysis of the Sentence Final Particle Yan in Kansai Japanese
３．学会等名 3rd International Workshop on Syntactic Cartography（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計6件

１．著者名 西原哲雄・中村浩一郎・松沢絵里・早瀬尚子	４．発行年 2024年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 169
３．書名 第1章　統語論　於　ブックレット英語学概説	

１．著者名 中村浩一郎・西原哲雄	４．発行年 2023年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 138
３．書名 第1章　英語の構造、第2章　X'理論、第3章　文の統語的階層分析から分かること、第4章．数量詞の作用域と数量詞繰り上げ、第5章．非定形節補文、第6章　定型節補文と名詞修飾節、第7章　文の情報構造構成に関与する構文　於ブックレット統語論・文法論概説	

1．著者名 Koichiro Nakamura	4．発行年 2022年
2．出版社 Peter Lang	5．総ページ数 189
3．書名 Word Order Matters: Current Issues in Syntax and Morpho-Syntax	

1．著者名 Koichiro Nakamura	4．発行年 2021年
2．出版社 John Benjamins Publishing	5．総ページ数 327
3．書名 Another argument for the differences among wa-marked phrases in Fuzhen Si and Luigi Rizzi. eds., Current Issues in Syntactic Cartography: A Cross-linguistic Perspective.	

1．著者名 中村浩一郎	4．発行年 2021年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 223
3．書名 第5章カートグラフィーと情報構造(IS)トのインターフェイス 於 統語論と言語学諸分野とのインターフェイス	

1．著者名 Koichiro Nakamura	4．発行年 2020年
2．出版社 John Benjamins	5．総ページ数 304
3．書名 Types and Functions of Wa-marked DPs and their Structural Distribution in a Japanese sentence in Pierre-Yves Modicom and Olivier Duplatre eds., Information-Structural Perspectives on Discourse Particles	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山城　智史 (Yamashiro Tomofumi) (50794616)	名桜大学・公私立大学の部局等・上級准教授 (28003)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関